

独思録：「党首討論」(5/31)

5 / 27、久方ぶりに自民党の麻生総理と民主党の鳩山代表による党首討論が行われました。衆院解散・総選挙を意識した自民、民主両党の前哨戦でしょうか、総理は民主党の政権担当能力、鳩山代表は政権交代の必要性を強調する形で討論は進みました。しかし、お互いに選挙の街頭演説のような抽象論で終わった感じです。

議員の評価もそれぞれの所属の党首に見方してか、自党の党首に甘く、結局はどっちもどっちで、国民は、鳩山代表が選出された直後に行われた、毎日新聞の世論調査の、「どちらが首相にふさわしいか」の回答で最も多かった「どちらもふさわしくない」(42%)に準じた結果と言っておけば間違いないようで、それぞれ「党首力」のアピールに課題を残す論戦結果だと評価したのではないのでしょうか。

党首討論後、毎週やっても良いという声もあることから、今後に期待しましょう。

しかし、ちょっと気になるのが4大紙のコラムの扱い、3紙は「ジャブの応酬」「投票日へと続く戦い」「党首の言葉争い」と取り上げていましたが、どちらかと言えば、常に総理に対し好意的に見えた1紙だけは、「歌を食べて生きていた」と昭和の大作詞家の死を取り上げていました。案外、鳩山代表の方が良かったので、党首討論をコラムに取り上げるのを避けたのではなかったと、穿った思いに囚われました。

今回の党首討論で、総理は原稿を作り、勉強したと報道されています。しかし、その後、また、漢字が読めない総理時代の勉強不足・検討不足がまたぞろ顔を出し、頭を擡げてきたようです。「厚生労働省分割再編成」における迷走です。

夏目漱石のエッセイに「現代日本の開化 明治四十四年八月和歌山において述」というのがあります。文豪漱石先生も気軽に講演を引き受けましたが、「はなはだお暑いことで、こう暑くては多人数お寄合いになって演説などお聴きになるのは定めしお苦しいだろうと思います。」で始まり、「全くのところ今日の講演は長時間諸君に対して御話をする材料が不足のような気がしてならなかったから、牧さんにあなたの方は少しは伸ばせますかと聞いたのです。すると牧君は自分の方は伸ばせば幾らでも伸びると気丈夫(きじょうぶ)な返事をしてくれたので、たちまち親船(おやぶね)に乗ったような心持になって、それじゃア少し伸ばしていただきたいと頼んでおきました。その結果として冒頭だか序論だかに私の演説の短評を試みられたのはもともと私の注文から出た事ではなはだありがたいには違いないけれども、その代り厭(いや)にやり悪(にく)くなってしまう事もまた争われない事実です。元来がそう云う情ない依頼をあえてするくらいですから曲折どころではない、真直(まっすぐ)に行き当ってピタリと終(しま)いになるべき演説であります。なかなかもって抑揚頓挫(よくようとんざ)波瀾曲折(はらんきょくせつ)の妙を極めるだけの材料などは薬にたくも持合せておりません。とそう言ったところで何もただボンヤリ演壇に登った訳でもないのです、ここへ出て来るだけの用意は多少準備して参ったには違いないのです。」と正直に告白しています。

ところが、総理は「厚生労働省再編」について、厚生労働相が「厚労省分割」「拙速でやるべきではない」と発言すると、舌の根も乾かぬうちに「こだわっていない」と議論の先送りにし、弁解に終始しています。

党首討論ではまあ五分五分であったのを、自ら、私は総理の資質に欠けていると言ったも同然のように思えます。

コラムで党首討論を書かなかった某紙のコラムニスト、先見の明があったようです。



党首討論で発言する麻生首相(27日午後、国会で) = 田中成浩撮影



党首討論で発言する鳩山民主党代表(27日午後、国会で) = 立石紀和撮影

<夏目漱石(1867-1916)>

小説家、評論家、英文学者。俳人(俳号は愚陀仏)。本名、金之助。江戸の牛込馬場下横町(現在の東京都新宿区喜久井町)生まれ。森鷗外と並ぶ明治・大正時代の文豪。

大学時代に正岡子規と出会い、俳句を学ぶ。帝国大学(後の東京帝国大学)英文科卒業後、松山中学などの教師を務めた後、イギリスへ留学。

帰国後東大講師を勤めながら、『吾輩は猫である』を雑誌「ホトトギス」に発表。これが評判になり『坊つちやん』『倫敦塔』などを書く。その後朝日新聞社に入社し、『虞美人草』『三四郎』などを掲載。当初は余裕派と呼ばれた。

その他『行人』『こゝろ』『硝子戸の中』『明暗』など。



読売:「厚労省分割」「拙速でやるべきではない」...舛添大臣(5/26)

舛添厚生労働相は26日午前の記者会見で、麻生首相が意欲を示す厚生労働省の分割について、「議論不足だ。拙速でやるべきではない」と述べ、急いで結論を出すことには慎重な姿勢を示した。

理由には総務省や国土交通省も膨大な所管業務を担っていることなどを挙げ、「省庁の再々編成をやるべきで、一厚労省の問題ではない」と語った。歴代の厚労相経験者や厚労省職員にも意見を聞くべきだと主張した。

また、公明党の「厚生労働行政のあり方検討プロジェクトチーム」は26日午前、国会で会合を開き、厚労省分割に関する党の見解を近くまとめることを決めた。

読売：「厚労省分割、麻生首相が「こだわっていない」…議論先送りへ」(5/28)

麻生首相は28日、与謝野財務・金融・経済財政相ら関係閣僚に検討を指示していた厚生労働省の分割・再編について、「最初からこだわっていない。分割の話ばかりするのはおかしい。自由な議論をした途端、あたかも既成事実のごとく、話を作るのはやめた方がいい」と述べ、分割という形にはこだわらない意向を表明した。

首相官邸で記者団に語った。首相は15日の安心社会実現会議で、厚生労働省を「社会保障省」と「国民生活省」に2分割する案を提案したが、閣内や自民党内には慎重論が強い。首相の発言を受け、分割の具体像などの論議は衆院選後に先送りされるとみられる。自民党の細田幹事長は28日夜、首相官邸を訪ね、首相に「党内には心配する向きが多い」と慎重な検討を求めた。首相は「分割の(具体的な)方針があるわけではない」と述べた。



春秋：「ジャブの応酬」(5/28)

平年より気温が高め、と聞いてももう驚かないが、あちらこちらに影響は出ている。ことしはホタルの見ごろが早まりそうだというのもその一つ。気象庁によれば、発光しながら飛ぶのを初めて観測した日が、例えば京都では平年より19日も早かったそう。

きのうはテレビを見ながら、ふっと「じゃんけんで負けて蛭に生まれたの」(池田澄子)という俳句を思い出した。画面には麻生太郎首相と鳩山由紀夫民主党代表が交互に大写しになっている。2人は45分間の党首討論で、ホタルならぬ国民に対して水の甘さを競ったのだろうか……。

初対決はジャブの応酬だったか。少々の強面(こわもて)を演出し、友愛社会建設や官僚支配打破を繰り返す鳩山さん。微笑か苦笑か冷笑かを浮かべて余裕を装い、西松建設事件で攻めて出た麻生さん。かみ合ったとも深かったとも思えぬ議論を聞いても、さてどっちに飛んでいくかは決められない、というのが正直な感想だ。

随分じらされたが、ホタルが乱舞するところには衆院選の足音は高まっているだろうし、選挙後は2人のいずれかが首相になるのもまず間違いないだろう。ならば、この国の姿をもう少ししっかり描き合ってくれないと困る。じゃんけんで勝って日本に生まれた。みんながそう思える国になればいい。無理だろうか。

<西松建設>

1874年に西松桂輔よって創業され、東京都港区虎ノ門に本社がある準大手総合建設業者(ゼネコン)。

ダム・トンネル等大型官庁土木を得意とする。ゼネコンとしては準大手ゼネコンの一角として強固な財務体質を備え、同じく準大手の建築を主体とする戸田建設との業務提携を結んでいる。

各政治家との関連性の強い企業であるといわれ、今回の政治資金規正法違反では同社OBらを代表とした政治団体(「新政治問題研究会」「未来産業研究会」)を隠れ蓑に使い、自民党の森喜朗・二階俊博・尾身幸次・加藤紘一、民主党の小沢一郎代表等、国会議員の資金管理団体へ多額の政治献金を継続していたことも、2008年12月31日に表面化している。



天声人語：「投票日へと続く戦い」(5/28)

「最後の段階がやっぱり難しいんだよねえ」。87年、自民党の総裁選で竹下登氏に先んじられた安倍晋太郎氏の述懐だ。民主党の鳩山代表もこれから、「詰めの苦しみ」を嫌というほど味わうだろう。

10年前、初の党首討論で口火を切ったのも鳩山氏だった。時の小淵首相に「総理は朝、何を召し上がったか。私は温かいピザをおいしく……」と切り出す。米紙に「冷めたピザ」と評された小淵氏へのジャブだ。政権が遠い気楽さゆえか、話の枕を仕込むために朝からピザを食す余裕があった。

昨日の鳩山氏は少し力んでいた。目の前の男を倒せばいよいよ頂上ということで、胸には代表選の日と同じ金じまの「勝負タイ」が垂れる。必勝のこだわりが首を絞め、官僚叩(たた)きの言葉がやや滑った。

一方の麻生首相、小沢前代表の献金疑惑という攻め手を頼りにチクチクと小さく刺した。鳩山氏が一蓮托生(いちれんたくしょう)をにおわせていたことを持ち出し、「言葉は大事にしなくちゃいかん」。この人が言うのと妙に説得力がある。

党首は表情、身ぶり、声色を含めた発信の技を問われる。一騎打ちともなれば、「何を言うか」以上に「どう言うか」が重い。初顔合わせはその点で、答弁慣れした首相が引き分けに持ち込んだかに見える。

何週間後になるか、投票日へと続く戦いが始まった。両者のやりとりは事実上の第一声である。あまりに短く、中身は浅く、ヤジも醜悪ながら、党首が言葉で切り結ぶ常道が戻ってきたのは喜ばしい。政党政治にはもう一つ、政権交代という常道があるのだが、さて。

< 竹下登 (1924-2000) >

第74代内閣総理大臣。14期衆議院議員を務めた。

島根県飯石郡掛合村(現・雲南市)生まれ。早稲田大学商学部卒。島根県議会議員を経て、1958年、島根全県区から第28回衆議院議員総選挙に立候補し、初当選。



自民党内では佐藤派、後に田中派に所属。佐藤内閣で内閣官房副長官、第3次佐藤内閣の内閣官房長官として初入閣、田中内閣でも再び内閣官房長官、その後も三木内閣で建設大臣、大平内閣で大蔵大臣、中曽根内閣で大蔵大臣(4期連続)を歴任。

1987年第74代内閣総理大臣に就任、1988年から1989年にかけて全国の市町村に対し一律1億円を支給するふるさと創生事業や日本初の付加価値税である消費税を導入した。

< 小淵恵三 (1937-2000) >

第84代内閣総理大臣。12期衆議院議員を務めた。

群馬県吾妻郡中之条町生まれ。早稲田大学第一文学部卒(修士)。1963年第30回衆議院議員総選挙に大学院在学中に初当選。



大平内閣で総理府総務長官・沖縄開発庁長官として初入閣。衆院予算委員長、竹下内閣で官房長官、自民党幹事長、自民党副総裁を歴任橋本内閣で外務大臣に就任。

1998年第84代内閣総理大臣に就任。総理大臣より官房長官時代に昭和天皇が崩御し、元号変更の記者会見で「新しい元号は「平成」であります」と公表した「平成おじさん」として広く知られる。

読売：「麻生首相と鳩山代表が初の党首討論、政権交代巡り応酬」(5/28)

麻生首相と民主党の鳩山代表による初めての党首討論が27日、国会で行われた。

首相は、民主党の小沢一郎・前代表の資金管理団体を巡る政治資金規正法違反事件を「国民の最大の関心事」として取り上げ、小沢氏を鳩山氏が党のナンバー2にあたる代表代行に起用したことについて、「『国民目線』から見ると、理解しがたい」と厳しく批判した。

これに対し、鳩山氏は、外部有識者で組織する党の「第三者委員会」で小沢氏から説明を聴取したことを明らかにし、近く報告書を公表する方針を示した。

また、24日のさいたま市長選で党県連が支持した新人が当選したことを挙げ、「(党の新体制に)国民が大変期待感を持っている」と反論した。

また、鳩山氏は、企業・団体の政治献金とパーティー券購入を3年後に全面禁止する政治資金規正法改正案を、今国会に提出する方針も表明。与党に賛成するよう求めたが、首相は「秘書の違反を契機に『制度が悪い』と言うのは論理のすり替えだ」と応じなかった。

首相は「政権交代は手段であって目的ではない。民主党の社会保障、安全保障政策は極めて不安だ」と、民主党の政権担当能力に疑問を投げかけた。鳩山氏は「今の自公連立政権は官僚主導の政権だ。これを打破しないといけない」と政権交代の必要性を強調した。

国会の党首討論は昨年11月に麻生氏と当時の小沢民主党代表との間で行われて以来、約6か月ぶり。

<小沢一郎(1942-)>

民主党前代表。衆議院議員(13期)

東京市下谷区(現在の東京都台東区)御徒町生まれ。本籍地は岩手県奥州市(旧水沢市)。

慶應義塾大学経済学部、日本大学大学院法学研究科へと進学。大学院在学中の1969年(昭和44年)、第32回衆院選に旧岩手2区から自由民主党公認で立候補し、27歳の若さで当選。

自民党総務局長、衆議院議院運営委員長を経て、1985年(昭和60年)に第2次中曽根内閣第2次改造内閣で自治大臣兼国家公安委員長として初入閣。

自由民主党幹事長、新生党代表幹事、新進党党首(第2代)、自由党党首を歴任。



余禄：「党首の言葉争い」(5/28)

民俗学者の柳田国男は「ことわざ」は「最初に口の武器として、敵を困らせるために発明せられ、また練習せられたもの」と書いている。たとえば隣村との水争いの時、人々はことわざをうまく使う村一番の口達者を談判に送り出した(ことわざの話)。

ことによっては刀や弓の技による争いとなる場面に、ことわざ=言葉の技で黑白をつけてきた日本人だ。この勝負、先方をののしり、味方を存分に笑わせ、相手を閉口--つまり何も言えなくさせれば勝ちだった。いわゆる「言葉争い」だ。

では、世が世なら天下分け目の合戦の総大将2人の「言葉争い」である。鳩山由紀夫民主党代表が選出されて初めて麻生太郎首相との党首討論にのぞんだ。だが口達者同士の丁々発止を期待した向きには、やや拍子抜けだったかもしれない。

英議会のクエスチョンタイムを手本に日本で党首討論が始まったのは10年前の小淵恵三政権の時代だ。その最初の党首討論の初質問で「首相は今朝何を召し上がったか。私は熱いピザを食べた」と尋ねたのは当時の民主党の鳩山代表だった。

「冷めたピザ」と評された首相への皮肉の後半は「この質問なら官僚の助けなしに答弁できるでしょう」。討論の史上第1投は変化球だった。だが10年後はもっぱら直球で麻生政権の「官僚目線」を批判した鳩山代表である。対する麻生首相の違法献金問題での反撃も直球だった。

官僚主導政治に政治資金--論点を振り返れば日本政治のこの10年にむなしさを感じる方もおいでだろう。天下分け目の決戦にのぞむ両党首には、どうかこの国の明日の選択肢を国民の心に届ける言葉争いに磨きをかけてほしい。

<柳田国男(1875-1962)>

民俗学者。現・兵庫県福崎町生まれ。東京帝国大学法科大学卒業(法学士)。名誉町民第1号。正三位勲一等。

大学では農政学を学び、農商務省のエリート官僚となった後、講演旅行などで地方の実情に触れる中、次第に民俗的なものへの関心を深めてゆく。

当時欧米で流行していたスピリチュアリズムの影響を受け、日本でも起っていた「怪談ブーム」のさなかで当時新進作家だった佐々木喜善の招きで、岩手県遠野を訪れ『遠野物語』を執筆。

他に宮崎県椎葉などへの旅の後、郷土会をはじめ、雑誌「郷土研究」を創刊。民俗学の確立した。

その他著書に『蝸牛考』『桃太郎の誕生』『海上の道』『イタカ及びサンカ』など。



<英議会クエスチョンタイム>

貴族院(House of Lords)と共に両院制を構成している庶民院(House of Commons)で行われている「質問の時間(Question Time)」で、議会の開会中は毎日、1時間が設定され

ている。

本来は党首討論と同義ではなく、党首討論はクエスチョンタイムの中の一部であり、むしろクエスチョンタイムは、知名度のない議員が活躍する機会としての意味合いが大きい。

また、あくまでクエスチョンタイムは「質問の時間」であり、「討論の時間」ではない。ゆえに議員が質問し、首相が答弁するのみであるが、その中でお互いが自らの政策をアピールしていくために、実質的には討論のような状況になる。

